

2018年度

男女共同参画フォーラム in 北九州



北九州市女性団体連絡会議
北 九 州 市

女性の輝く社会づくり

一生のワークライフバランスで「キラキラ輝く女性へ」

講演

講師

有限会社ゼムケンサービス

代表取締役

一級建築士・管理建築士

籠田 淳子



1 はじめに

本日は、私が経験してきたこととお話します。また、建設業界がどのようになっているのか、我が社の女性たちと女性の活躍についてもお話します。まずは自己紹介だが、今や私は、建設業界のジャンヌダルクと言われている。実は私は大工の娘なのだ。私が生まれる前から父がハゼモト建設という建設会社をしていて、亡くなった後、兄と私がそれをそれぞれに受け継いだ。

2 私のチャレンジと受賞が意味するもの

長崎出身の父は、大工の修行のために大阪に出た。修行時代は、非常に苦勞したようだが、いつかは九州に帰りたいとの思いから、その当時、多くの仕事があった小倉に来た。父は後に、小倉の町で自分が建てた建物を私に話して聞かせた。そんな父は非常に頑固な職人で、棟上げという行事がある時、「女、子どもはうろうろするな。」と言っていた。棟上げでは、きちんと柱を立てないと家が崩れてしまい、職人が大ケガをしてしまう。それは、職人にとって命がけの仕事なのだ。

昭和7年生まれ父、9年生まれ母は、本当にすごく働いて働いて、私は、寝ている両親を見たことがないくらいだった。商いというのは、男だけでも女だけでもできない、お互いが助け合っていないと立ち行かないと思っている。しかし父は、私が建築の道に進もうとしたとき、女

性には電話、お茶くみくらいしか、させてもらえない業種だから、後継ぎは兄にしようと思った。私には女性としての道を選んでほしいようだった。

そんな私が建築の道に進み、様々なチャレンジを試み、北九州市ワークライフバランス市長賞(個人・企業)、内閣府女性のチャレンジ賞を受賞した。これは、12年前に、女性建築士2、3人で仕事を分担するワークシェアリング(仕事の分かち合い)によって、女性活躍の場を創出できたことによる賞だったように思う。限られた時間しか働けない女性たち、しかしそのライフステージに合わせた働き方を提案することで、社会も個人も活きるシステムを模索してみたのだ。現場が、男性ばかりで女子トイレもない状態の中で、業界にとって女性に価値があるということ、このような女性主体の経営でも業績が伸ばせるということを証明したことで、第1回内閣府「女性が輝く先進企業表彰」特別担当大臣表彰を受賞することができた。また、内閣府「女性のチャレンジ賞」受賞の折には、総理官邸に呼んでいただいた。当時、中学生の息子と訪れたのだが(官邸は、高校生以上しか入れない)、二人で総理官邸の前で写真を撮れたのが、非常に貴重な一枚となった。安倍総理からは、「これからは中小企業の時代です。そして地方創生、よろしくお願いしますね。」と言っていた。

内閣府がまとめたこの賞の受賞理由は、「男性が多数を占める建設業界において、大工の娘である籠田淳子代表は、女性だからできる経営を決断。その強いリーダーシップのもと、会社経営とダイバーシティ経営、さらには男女共創の実践で、業界内で弱みとされていた女性であることを強みへと転換させ、女性視点の強調戦略により5年で売上を倍増させた。」というものだった。

建設業界では、女性が現場にいることはほとんどない。私は大工の娘だからこそ、職人が喜ぶこと、必要なものが分かっている。今この業界は、厳しい時代に入り、利益をなかなか出せなくなっている。しかし、職人は、自分の仕事にプライドをもっていて、なかなかそのスタイルを変えてくれない。生活様式も変わり、住宅も随分と形が変化してきた。その変化を促すのは女性だ。私は大工の娘として、そのDNAを受け継いでいて、父と同じ道を進まなければとずっと思っていた。父は、女性が働けるような業界ではないと反対した。そこで私は、建設業界では、圧倒的に少ない女性ということを反対に強みにしようと考えた。また、粗利益といわれるものが大切にされるが、売り上げをどんどん上げようと思ったら、働き続けなければならない。しかし、私たちは付加価値のある仕事をして、お客様に喜ばれる道を模索した。父は、私が建設を志すことにずっと反対だったが、私の本気で取り組む姿を見て、一緒に面白い仕事をしようこの会社を立ち上げた。女性は感性をもっていること、様々なことに気付く力が強みと感じているが、これを空間において、どのように活かしていくのかを考え、五感設計というものを編み出した。

3 ワークライフバランス、ワークシェアリング

現在、男女の賃金格差は、アメリカなどと比べると大きな開きがある。男性と同じように勉強をし、社会に出てきた女性が、今も旧態依然とした建設業界に本当に魅力を感じ続けられるかという疑問が残っている。しかし、女性も社会参画したいと思っている人は沢山いる。妻として、嫁として、母としての役割を全うすることも素晴らしいことだが、女性が自己実現を求めてもよいのではないかと思う。女は欲張りでいいと私は思っている。未だに日本の建設業界では、女性に現場は危なくて任せられないという空気がある。この業界ではずっと、女性は、皆諦めて辞めていく。女性

活躍のためには、男女が戦い合うのではなく、違いを認め合うことが大事なのだと私は理解している。ワークライフバランスは仕事と家庭の調和と言っているが、私はさらに相乗効果があると思っている。また、ワークシェアリングは、一つの仕事を2、3人で担当することによって、得意と不得意を補い合うことができる。



ワークライフバランスにとって大事なことは、長期の展望を持つことだ。我が社では、ゼムケンノートというものがあって、それに目指すこと等を書き込んでいく。自分の働き方のデザインをすることが、働き続けるためのコツなのだ。

4 おわりに

最後に、「キラキラ輝く女性」というのは、仕事はもちろんだが、プライベートも充実していることが大切だ。経営者としては、ワークシェアリングで、社員一人ひとりを活かすことで生産性を上げることを目指しているし、この業界の中で、圧倒的に少ない視点を特徴とすることで会社を伸ばしていきたいと思っている。そして、私の長年の夢は、建築建設女学校の設立である。女性を育て、建設業界に女性が活躍できる道を作りたいと思っている。

参加人数 92名 (男性5名)